

10 言語活動の進め方

☆PISA調査とは

経済協力開発機構（OECD）による国際的な生徒の学習到達度調査で、実生活のさまざまな場面で直面する課題に知識や技能をどの程度活用できるかを測ることを目的としています。

対象は義務教育終了段階にある15歳の生徒で、読解力・数学的リテラシー・科学的リテラシーの3分野について調査を実施します。

2022年の調査には、81か国・地域の約69万人が参加しました（日本の参加者は約6,000人）。

国立教育政策研究所
OECD生徒の学習到達度
調査（PISA）



言語活動の充実が求められる背景

令和5年12月、2022年に行ったPISA調査（PISA2022）の結果が公表されました。日本は全ての分野で前回調査（2018年）と比べて平均点が上昇していましたが、これは「主体的・対話的で深い学び」を目指す学習指導要領を踏まえた授業改善が進んだこと、学校におけるICT環境の整備が進んだことなどの様々な要因によるものだと分析されています。

高等学校でも、旧学習指導要領より、一人ひとりの生きる力を育むことを目指し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むために、言語活動の充実を図ってきました。

引き続き現行の学習指導要領においても、より一層の言語活動の充実を図り、学習の基盤である言語能力を向上させることが必要不可欠であるとされています。

各教科等における言語活動の充実

国語科においては、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」、「読むこと」に関する基本的な国語の力を定着させたり、言葉の美しさやリズムを体感させたりするとともに、発達の段階に応じて、記録、要約、説明、論述、討論といった言語活動を行う能力を身に付けます。

各教科等においては、国語科で身に付けた能力を基本に、それぞれの教科等の目標を実現する手立てとして、言語の役割を踏まえて、言語活動を充実させる必要があります。



「話す」ための「書く」支援、「書く」ための「話す」支援

個別支援が
必要な生徒
への対応を
考えよう

自分の考えや意見を述べたり作文に書いたりすることが苦手な生徒がいます。うまく言えない生徒には、頭に浮かんだことをメモに取らせ、それを見て話させる。うまく書けない生徒には、指導者が言いたいことを聞きとり整理するなど「話す」ためには「書く」活動を支援し、「書く」ためには「話す」活動の支援をすることがそれぞれ有効です。

「思考力、判断力、表現力等」の育成と 言語活動の充実

「思考力、判断力、表現力等」とは、「知識及び技能」を活用して課題を解決するために必要な力のことです。次に示す地理歴史科、公民科の例を参考に、学習過程に応じた効果的な言語活動を取り入れましょう。

地理歴史科、公民科における例

課題把握	動機付け	<ul style="list-style-type: none"> ● 学習課題を設定する <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会的事象等を知る ・ 課題意識を醸成する ・ 気付きや疑問を出し合う ・ 学習課題を設定する
	方向付け	<ul style="list-style-type: none"> ● 課題解決の見通しを持つ <ul style="list-style-type: none"> ・ 予想や仮説を立てる ・ 調査方法、追究方法を吟味する ・ 学習計画を立てる
課題追究	情報収集	<ul style="list-style-type: none"> ● 予想や仮説の検証に向けて調べる <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校外での観察や調査などを通して調べる ・ 様々な種類の資料を活用して調べる ・ 他の生徒と情報を交換する
	考察・構想	<ul style="list-style-type: none"> ● 社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連性を考察する <ul style="list-style-type: none"> ・ 多面的・多角的に考察する ・ 話し合う（討論等） ● 社会に見られる課題を把握して解決に向けて構想する <ul style="list-style-type: none"> ・ 複数の立場や意見を踏まえて解決に向けて選択・判断する
課題解決	まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ● 考察したことや構想したことをまとめる <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習課題を振り返って結論をまとめる ・ 結論について他の生徒と話し合う ・ 学習課題についてレポートなどにまとめる
	振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ● 学習を振り返って考察する <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の調べ方や学び方、結果を振り返る ・ 学習成果を学校外の他者に伝える ・ 新たな問い（課題）を見出したり追究したりする
新たな課題		

中央教育審議会 平成28年12月「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）別添資料」より抜粋

☆言語活動の充実を図るための視点

神奈川県立総合教育センター研究成果「〈高等学校〉言語活動の充実を図る実践事例集」には、次の三つの視点が示されています。

- (1) 各教科・各単元の指導計画において、言語活動を明確に位置付ける
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成するための指導と学習活動の工夫をする
- (3) 効果的な学習形態を工夫する

☆言語活動と情報活用能力の関係

情報教育が目指している情報活用能力を育むことは、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着とともに、発表、記録、要約、報告といった、知識・技能を活用して行う言語活動の基盤となるものです。

情報活用能力についての解説は、参考資料-3に記載がありますので、確認しておきましょう。

神奈川県立総合教育センター「〈高等学校〉言語活動の充実を図る実践事例集」より

「思考力、判断力、表現力等」を育成するための指導と学習活動の工夫について、「考えをもつ」、「考えを広げる」及び「考えを深める」の三つの視点で整理しました。

- 「考えをもつ」
- 根拠や理由を考えさせる・・・「考えの根拠は何か」と問い、単なる感想でなく、まとまった考えを持たせる。
 - 比較させる・・・対象となるものを注意深く観察する必然性が生じ、共通点等を見いださせる。
 - 考えを記述させる・・・記述させることで考えを明確にさせる。
- 「考えを広げる」
- 説明させる場面を設ける・・・他の生徒の考えを聞くことで、新しい見方や視点に気付かせる。
- 「考えを深める」
- 考えを振り返らせる・・・自らの考えが深まったことを実感させる。新たな気付きを促す。
 - 計画的・継続的に取り組ませる・・・学習の意義や有用性を実感させ、より深く考える力を身に付けさせる。